

危険因子を複合的に有する症例は特に留意する必要がある。発症した場合、早期発見に加え、VCMの早期内服開始が有効である。

9 GVHD関連消化管病変における cytomegalovirus の関与

船越 和博・新井 太・本山 展隆
秋山 修宏・稲吉 潤・加藤 俊幸
大田 玉紀*

県立がんセンター新潟病院内科
同 病理*

graft-versus-host disease (GVHD) 腸炎9例につきサイトメガロウイルス (CMV) の関与について検討した。血清CMV抗原かつ大腸生検組織でCMV陽性となった症例は1例のみで(11.1%)、随伴性CMV感染と考えられた。上部消化管症状を伴い上部消化管検索が行われた症例は4例(44.4%)で、全例、腸炎とほぼ同時期に発症し、胃十二指腸粘膜のびらん、発赤、易出血性を特徴とした。病理組織学的に炎症細胞浸潤、毛細血管拡張、間質浮腫、出血、apoptotic bodyの出現を認め、CMV、ヘリコバクター・ピロリは陰性、NSAIDの関与も否定的であり、GVHD胃十二指腸炎と呼べる病態と考えられた。

10 サイトメガロウイルス・感染を随伴した毒性巨大結腸症を呈した潰瘍性大腸炎の1例

島田 能史・飯合 恒夫・岡本 春彦
須田 武保・畠山 勝義・河内 裕介*
本間 照*・味岡 洋一**

新潟大学第一外科
同 第三内科*
同 第一病理**

症例は66歳男性。潰瘍性大腸炎(全大腸炎型)に対して水溶性プレドニン60mg/dayを約3週間施行した。サイトメガロウイルス(CMV)抗原陽性であり、抗ウイルス薬を開始したが、全身状態が急速に悪化し、中毒性巨大結腸症と診断して緊急手術(結腸全摘除術+粘液瘻)を施行した。

病理検査では、HE染色および免疫染色で、潰瘍底および粘膜内の血管内皮細胞にCMV感染が認められた。

CMV感染は潰瘍性大腸炎の難治化要因の一つと考えられており、漫然とステロイドを使用し続ける事は、CMV感染を誘発する可能性があるため慎むべきであると考えられた。

11 コンピューター制御フレキシブルシャフト自動吻合器“SurgASSIST”の使用経験

山崎 俊幸・山本 睦生・宮澤 智徳
桑原 史郎・大谷 哲也・片柳 憲雄
斎藤 英樹・藍沢 修

新潟市民病院外科

従来、自動吻合器のシャフトは、弯曲してはいるが柔軟性に欠ける硬性シャフトであり、またアンビルの出し入れやファイヤリング操作はハンドルやレバー等の用手的操作である。今回、シャフトが内視鏡の如くフレキシブルで、アンビルの出し入れとファイヤリング操作がコンピューター制御のリモコン操作となった新しい自動吻合器“SurgASSIST”を使用する機会を得た。結腸癌6症例に使用、1例は2箇所吻合を行い合計7吻合を経験した。術式は回盲部切除、右半結腸切除、横行結腸切除、S状結腸切除と多様で、吻合径も25, 29, 33mmと各種使用した。合併症は吻合部出血1例とsubileus 1例であった。経肛門的に挿入することで、回盲部切除など深部においても端々吻合が可能な利点はあったが、挿入・抜去時に術野からの用手誘導が必要な点は、将来的に腹腔鏡手術での完全体外操作を目指すにはまだ改良・克服すべき問題点と感じられた。